

烏人かたや

濟通原菅

實業之日本社版



日文 701689496

178195

やまかん鳥

菅原通濟



実業之日本社版

やまかん鳥

価・250 円

地方価・260 円

昭和二十八年六月二十日 印刷
昭和二十八年六月二十五日 発行

著 者 菅 原 通 齋

発行者 梅 山 紘

印刷所 星野精版印刷株式会社

発行所 実業之日本社

東京都中央区銀座西一―三
振替 東京三二六番
電話 京橋 (55) 五一二―五

やまかん鳥

はしがき

たまには、乙な表題にしてみたいと、せっかく「花の絵」とつけたのに――先生らしいとぼけた題にしてください――

と、しかられた。

実業之日本も、あんどわい話せるやうになつたとみえる。

「やまかん鳥」は、中味とは何等関係のない題である。

ないが、「花の絵」をフラれて弱りきつてゐたヤサキ、あさ、門をでたら、つひ眼と鼻のさきにある豌豆マメの柵の上にとまつてゐた鳥のヤツ、にげようともせず、エヘラ、エヘラ、黒い笑ひをやつてゐるのが、いかにも山勘通濟そっくりなので、そのままいただくことにしたまでである。

初夏某日

通濟道人

目次

弁才天と弁財天……………七

八臂 弁才天……………七

ストリップ 弁財天さんげ……………二

シヤガラ様……………三

松茸 夜話……………二七

王冠のお値段……………三一

貯金は宝石から……………三一

黒 太 子……………三三

サクソン王の指環……………三六

クレオパトラ 真珠を飲む……………三七

深海のやうなエメラルド……………四二

アフリカの星は輝く……………四三

す っ ぽ ん……………四四

花 の 絵……………四四

黒衣の佳人…………… 四

光秀とお茶…………… 五

花と総理…………… 七

二十一年間勤務…………… 八

五時の朝酒…………… 九

虎議長…………… 九

うど…………… 金

夫の青春…………… 六

午前二時…………… 八

銀座アレこれ…………… 九

五十年の想ひ出…………… 九

年末風景…………… 三

一日マスタ…………… 四

ミス銀座…………… 九

銀座ブラ…………… 一〇

粹が身を喰はぬ……………一二四

恵子さんと恵子ちゃん……………一二四

旅で拾った話……………一三二

ウラニウム鉱山送り……………一三二

黒美人……………一三四

左多牟知……………一三七

豪傑龍崎……………一三八

霧積温泉……………一三九

名古屋の近友……………一四〇

花火大会……………一四四

親切どころ……………一四五

菅原村……………一四七

喰ひある記……………一四八

マヅイそば……………一五二

布引観音……………一五三

万座から山田温泉へ……………一五四

朝のスキ焼	一五八
恵子さん物語	一六二
加藤武男翁	一七〇
公ちゃん	一七三
先輩の死	一七三
照月湖畔白哲老人	一七八
義宮様	一八六
かぼちやボート	一八八
自転車親善外交	一九〇
タコ入道	一九二
胸襟を開けぬわけ	一九七
落セシ候補	二〇四
浜松の風	二〇九
活俳弁士	二二四
昭和電工事件と私	二三三

日野原節三を世に出すまで	二三三
--------------	-----

帳簿数字にはゼロの日野原	二三八
芦田と昭電は別問題	二三二
お　　濠　　端	二三三
囚人第百五十号	二三六
土建献金のボスといはれて	二四三
私の出獄と芦田逮捕状	二五〇
八十八日目の自白	二五四
日野原の生きる道	二六〇
本書に登場する人名録	二六五
菅原通済著書目録	二七七

弁才天と弁財天

八 臂 弁 才 天

弁天さまが、ミールハー族はじめ、大衆に親しまれるのはなぜか。

弁才天[◎]は印度ガンジス河にある、福德圓滿を希ふ、民衆信仰の社祠の神体で、大弁才[◎]功德天女といはれる神女、金光朋最勝王経によれば、エンマ大王の娘だから如何にも対照が面白い。ところが、エンマ大王は地藏菩薩の化身だから福德圓滿のところ、似たのかも知れない。一説には、梵天王の妃となったとも云ひ伝はつてゐるが、あんまりアテにはならぬ。

東漸以来の仏教が、永らく貴族階級の信仰となつてゐたが、ずっと後代になつて、広く、民間に弘通してくるやうになると、いつの間にか弁才天が弁財天（才と財のちがひ）といふ文字を使ふやうになつてきた。

べつにはっきりした区別があるわけではないが、一面八臂の立体像が八臂弁才天[◎]で、琵琶を奏でる裸形の坐像が、妙音弁財天[◎]であるとされてゐる。

弁才天は、弁舌、知慧、福德、音楽を受持つ、七福神の一つとして、八つの手にそれぞれ、右手には鉾矛、棒、鎚、箭、左手には鉾矛、輪宝、宝弓、宝珠を持ち、十五人の童子を従へ、頭に宝冠をいただき、そのなかに、白蛇がゐてお守りする立体像が本格的なものとされてゐるが、あまりにもグロテスクで、民衆に不向きとも思つたのか、ガンジス河の波のひびきを表徴して、琵琶をかなでるあのエロツぽいオール・ストリップのお姿とし、秘仏だから巳年の何年目にかは御開帳をして、御神体が拝めるんだ、と興味本意から人心のキビをつかんで、つくりあげたのが妙音弁財天である。

つまり表裏一体のものとして、弁天さまの信仰をいやがうへにも、盛ならしめたものである。

だから、八臂弁才天[◎]のはうが、弁舌、知慧、即ちオシャベリの代議士諸君、ヘリクツの学者諸君の受持ちて、妙音弁財天[◎]が、福德、音楽、即ちよくばりな実業家や、センチな音楽家の受持だと分業にしたわけでもないが、坊主ともなると、ひまだからいゝろんなことを考へだす。

八臂弁才天で、最も古いのは東大寺にあるので、おつぎがおそらく美術学校の厨子の内扉にある、奈良朝時代のものだと思ふ。

琵琶湖の津久夫須磨神社、つまり竹生島のも有名で、行基菩薩が弁天を拝し、本地垂迹の地としたので、これは妙音弁財天つまり裸行のはうだが、常時は八臂の弁才天を安置してある。

江の島のも有名で、本体は八臂の弁才天で鎌倉時代のものだが、それよりも、全国的に有名になつてゐるのは、源頼朝の寄進した妙音弁財天つまり裸像である。

不忍池の弁天島に鎮座してゐるのは八臂で、天海僧正が竹生島から勸請したのである。

絵画では、藤原時代のものはちょっと見当らないが、岩崎男爵家蔵の静嘉堂文庫にある、巖頭に座して琵琶を奏でた妙音弁財天が、或ひは一番古いかも知れない。

ガンジス河の流れの音が表徴だから、水の精だの、音楽の神様だのと、なかなかうまいこじつけをやるが、江の島の源頼朝が寄進した裸像なんかは、なかなかエロっぽく出来てゐる。

だいたい弁天さまは印度産だけあって、餅はだだし、オッバイも、みづみづしい白桃のやうだし、お顔もふくよかな愛嬌もので、

「面は満月の如く眉目は青蓮、身光普く照らし百千日の如く光彩映徹す」

と、讃嘆品でほめあげてゐるくらゐだ。

(毎日新聞)

ストリップ弁財天ざんげ

俗説ではなはだ恐れいるが、愛嬌ものの弁財天のうちで、日本にはるばるやってこられた江の島の弁ちゃんが、ひとりぼっちであんまりながく暗いところにとどこめられたので、なやましさのあまりとんでもないことを仕出かされたらしいが、そこは仏の身だけに後悔されたのだらう、昭和の御代になってから吾輩のところに、ある夜おしのびでおいでになり、しみじみざんげされたので、衆生済度のためオール読物に、そのいちぶしじゅうを書いたのがこれである。

妾は何代目かの江ノ島神社のお守役として源頼朝さまからは是非々々とのお話しが御座いましたので、はるばる天竺から渡った弁財天で御座います。

だのに、昭和の御代になって、あられもない全裸の姿を如何にアメリカ製民主主義

の御時世とはいへ、衆生のまへに、かうした姿をさらさねばならぬかと思ふと、泣くにも泣けぬなさない思ひで御座います。

それでも頼朝さまからお話のありましたときは、薄水色に地紋のある緞子の衣、宋代渡来の金地金欄カナデを羽織らしていただいてをりました。

それをどうしても、ぬぎすてさせられるやうになりましたに就いては、お恥かしいことで御座いますが、これだけは女同志でなければわかっていただけぬかずかずのはれが御座います。

ことは巳年のせゐか、御参詣のかたが、めつきり多く、それに四月十二日にはどうしても鎮座千四百年祭がありますし、かてて加へて恥かし乍ら妾も出開帳をしてミス・ストリップパーとして是非とも、けがれ多い衆生の前で全裸の姿を白昼さらさねばならぬハメに追ひ込まれましたが、夜の銀座、浅草のキャバレーですら、アソコを少しは何かでかくせるのに、妾に限り白昼それこそ文字通り、一条もまとはせぬとは何たるインガで御座いませう。

その衣をぬがされましたわけも、ゲンカク？な意味から申せばミスでない次第も、このさい、一さいがっさいザンゲさせていただきましたうへ、理解ある信者を得たいと思ふのであります。

妾は釈迦如来の深い御思召にそむいたわけでは決してないので、申すも恥かしい思ひをせねばならぬハメになってしまひました。なんといふ因果でせう。

——その次第は、すこしながくなりますが、是非とも——けがれおほい男衆にも、きいていただきたいので御座います。

妾から申すのも、いなことは存じますが、印度の婦人は肌のきめがなめらかで、俗にいふ羽二重はだとか、餅はだとかのものが多く、それに、肉づきもふくよかなエロツぽい姿がその当時からはやりましたので、自然乳房などは、うれた水蜜桃のやうにみづみづしく、乳首は女同志ですらベルのかはりに押したくなるやうだと、よく云はれたものでした。

それに顔だちも日本の皆様にかれるやうに下ぶくれで、愛嬌たっぷり御座いま

す。

江の島に勤務致しまして感じましたことは、御参詣の方々のなかには、お賽銭をキザンでおきながら、よくばったり、随分無理な願をかけるかたも数多いやうでしたが、それでもなるべくなら、かなへて差上げるやうに、との内命もありましたので、つとめて最高方針に従って、ともかく四百年はどうやら、大過なくすごしましたが、徳川さまの御代もずっとのちになりましたころ、とんだ心臓男が現はれましたばかりに、あられもないことになってしまひました。

だいたい、あの暗い社殿の奥に年頃の女一人を四百年間も、とどこめておくのがそもそも間違ひで、如何に仏の身とは申せ、ハチキレさうなからだを、もちあぐむのが、あたりまへで、ヒョンなことからまちがひを起したとて、さしてとがめだてすることでもなし、女心を知るかたには、よくわかつていただけることと存じます。

或日のこと田沼藩のお武家さんで、恰腹のよい、四十ガラミの苦みばしったかたが、御参詣に見え、しきりに何かひとりごとをツブヤイて居られました、がその日は